

# 古典の日

十七

## 酒田



## 松尾芭蕉

五月雨が光堂を「降り残す」。蝉の音が岩に「しみ入る」。五月雨を「集める」。そして雲の峯が「崩れる」。——ふり返ってみると、芭蕉は一句のキーワードとなる動詞の選択に無類の才を発揮している。

キーワードなどというよりも、俳句という一つの肉体的腰骨をなす動詞とでもいったほうがよいかもしれない。それは芭蕉独特の鋭敏きわまりない一種動物めいた運動の感覚を体している動詞で、それによって彼は時間・空間の動きを即座にしたたかに捉えて表現する。たとえは前回の「雲の峯幾つ崩れて月の山」の「崩れる」なども、詩人が好む格別なうつろいの感覚が託された言葉であった。最晩年(元禄七年)、死を数ヶ月後にした頃の句にもこうある。

夏の夜や崩れて明し冷し物  
秋の夜を打崩したる咄かな

ここにも、同じく方正・緊張からやわらぎへ、安らぎへと時間空間が弛みほけてゆく感覚、古代の万葉人たちが「夜のほろろ」とも呼んだ弛緩と拡散の感覚が、みごとにとらえられているのではなからうか。

今回の酒田港、最上河口での日本海眺望の句にしては、も動詞の動きが強靱ですばらしい。私たちならば「暑き日の海に入りたり最上川」ぐらいで終るところを、芭蕉はなんと「暑き日を海に入れたり」と他動詞を用いて擬人化し、一気に天地山川の演ずる壮大なドラマに仕立てた。曾良も「暑甚し」と書きつけている六月半ば(陽暦七月三十日)の猛暑の一日、照りつづけたその太陽をいま最上川は力づくで日本海の波濤のなかに押し入れて、海辺からようやく涼しさが寄せてくるという。太陽と海と大河とが三つ巴に揉みあっている。海上に黄金と薄墨の夕景を演じてみせているのだ。

羽黒山から鶴岡城下下って藩士長山重行の家に泊って、面白い一歌仙を巻いた。船で酒田に移って医師伊東淵庵宅で「温海山や吹浦かけて夕涼」に始まる連句の会を催した。暑さのなかの長旅に疲れてはいなくても、芭蕉の詩心の昂揚はいささかもおとろえていなかった。

# 奥の細道



あつみ山や  
吹浦かけて夕すゞみ  
暑き日  
海に入りたり最上川

山形県鶴岡市近辺の海岸から日本海を望む。近くには芭蕉の「あつみ山や……」の句碑もある。

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集2『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

## 太陽と海と大河の三つ巴

## おくのほそ道

芳賀徹さん

とたずねる

17



「ゆく川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらず」

下鴨神社神官の次男と

「古典と私」

して生まれた鴨長明が、日野山伏見区に庵で書いた方丈記の冒頭の一節です。正直、若い頃、古典は全くの苦手でほとんど

五月雨が光堂を「降り残す」。蝉の音が岩に「しみ入る」。五月雨を「集める」。そして雲の峯が「崩れる」。——ふり返ってみると、芭蕉は一句のキーワードとなる動詞の選択に無類の才を発揮している。

キーワードなどというよりも、俳句という一つの肉体的腰骨をなす動詞とでもいったほうがよいかもしれない。それは芭蕉独特の鋭敏きわまりない一種動物めいた運動の感覚を体している動詞で、それによって彼は時間・空間の動きを即座にしたたかに捉えて表現する。たとえは前回の「雲の峯幾つ崩れて月の山」の「崩れる」なども、詩人が好む格別なうつろいの感覚が託された言葉であった。最晩年(元禄七年)、死を数ヶ月後にした頃の句にもこうある。

夏の夜や崩れて明し冷し物  
秋の夜を打崩したる咄かな

ここにも、同じく方正・緊張からやわらぎへ、安らぎへと時間空間が弛みほけてゆく感覚、古代の万葉人たちが「夜のほろろ」とも呼んだ弛緩と拡散の感覚が、みごとにとらえられているのではなからうか。

今回の酒田港、最上河口での日本海眺望の句にしては、も動詞の動きが強靱ですばらしい。私たちならば「暑き日の海に入りたり最上川」ぐらいで終るところを、芭蕉はなんと「暑き日を海に入れたり」と他動詞を用いて擬人化し、一気に天地山川の演ずる壮大なドラマに仕立てた。曾良も「暑甚し」と書きつけている六月半ば(陽暦七月三十日)の猛暑の一日、照りつづけたその太陽をいま最上川は力づくで日本海の波濤のなかに押し入れて、海辺からようやく涼しさが寄せてくるという。太陽と海と大河とが三つ巴に揉みあっている。海上に黄金と薄墨の夕景を演じてみせているのだ。

羽黒山から鶴岡城下下って藩士長山重行の家に泊って、面白い一歌仙を巻いた。船で酒田に移って医師伊東淵庵宅で「温海山や吹浦かけて夕涼」に始まる連句の会を催した。暑さのなかの長旅に疲れてはいなくても、芭蕉の詩心の昂揚はいささかもおとろえていなかった。

## 「もの語りづくり」のまち

京都市長 門川大作 さん



読んでおりませんが、好きな一節はよく口ずさんでいました。

京都では、今も先人が古典に託した豊かな詩情を、まらしたたすまいや山紫水明の自然、年中行事の中で感じられます。もっと若いときに、古典に親しんでおくべきだったと感じる日々です。

さて、京都は、伝統産業から先端産業まで、すばらしい「ものづくり」のまちです。同時に世界に冠たる「もの語りづくり」のまちだと思えます。古典はもとより、マンガ・アニメも、映画も、ゲームも、さらには、茶道、華道、香道、京料理も、すべて根本は「もの語り」だと思います。

「古典文学・文化を広めよう」と、古典の日推進委員会は1月1日を「古典の日」と定めた。



清閑寺境内に立つ小督局の供養塔(京都市東山区)

清閑寺へは清水寺を拝観後、子安の塔を過ぎ出口とは反対のほうへ向かいます。竹林を抜けると10分ほどで到着です。散策にぴったりのこの道は「歌の中山」と呼ばれ、清閑寺の僧の迷いの心を仏が諭したという「見るにだに迷ふ心のはかなくて誠の道をいかで知るべき」という歌から名付けられました。清閑寺からは扇を開いたように広がる京都の街が一望できます。境内は静かで、運命に翻弄された人々の生涯に思いをはせるには絶好の場所です。

(NPO法人・都草 深澤 光佐子)

## 清閑寺に伝わる悲恋

## 文学ウォーク

美人で、琴の名手だった小督は高倉天皇の最愛の人でした。しかし、平清盛にとっては邪魔な存在でした。それを察した小督はひそかに嵯峨野に身を隠しますが、天皇は宮中に連れ戻します。美しい月夜の晩、琴の音色がきっかけで見つかったとされ、琴きき橋跡の碑が嵐山の渡月橋北詰に立っています。

宮中に戻ったのを知った清盛は、小督を清閑寺にて無理やり尼にしてしまいます。深く悲しまれた天皇は小督のいる清閑寺に葬ってほしいとの遺言を残して21歳の若さで亡くなります。その願い通り、高倉天皇陵は清閑寺にあり、天皇を一生弔い続けた小督の墓も寄り添うようにあります。平家物語に書かれている悲恋のお話です。